

反転させられた認識からの脱出

—丸山敏雄の思想と純粋倫理の現代的な意義—

高橋 徹

混乱は、誰かが子供—完全に発達した感覚があり、^{シールド}盾を持たない—のところにやってきて、毎日のやりとりを通じてバイアスとゆがみを埋め込むときに始まります。(ルハン・マトゥス)

はじめに—心を先行させなくなった理由を探る

倫理研究所の創業者・丸山敏雄(1892-1951)は、「心が先行する」と述べた。この言葉は、われわれが自律性や自発性を失って外的な現象世界にとらわれ、内的な心の世界における自由を束縛されたことに対して発せられているように見える。つまり、「心が先行しないこと(心の後追い、後づけ)」が現代人の習性になったこと、そしてそれが諸問題を引き起こしていることを見てとった敏雄から発せられた言葉ではないだろうか。

「心が先行する」とはどういうことか？それは、もともとの物事の成り立ちにおいて、われわれの心や意識が最初にあり、それから具体的な行動や現象が生じることを指している。しかし、われわれはこの順序にのっとって生きていないことが多い。そのため、この「心が先行する」は、望ましい行動の指針ともなる。つまり、目に見えないもの、たとえば「気づき」が行為に先行するという具合である。あるいは最初に心おこないを自然かつ自発的なものにして、それに応じて行為すること、ひとことと言えば「即行」ということになる。

これが逆になって、対応が後手にまわっては、物事は何も解決しないのだが、われわれの日常生活は、常に後手にまわっていることが多い。

例をあげよう。通常、われわれは何か事件や事故が起こってから、そのようなことが今後起きないように、法律を改正したり、対策を立てたりする。しかし、それでは遅すぎるし、効果のないことが多い。なぜなら、出来事の真の原因を究明し、それを変えることが先なのに、まずは対処に追われるからである。われわれの対処は目に見える表面的な事柄に終始し、根本的な解決にはいたらない。

もちろん、何かの事故が起きたり、緊急事態が発生したりしたときには、まずそれに対処すべく迅速に行動する必要がある。

また、怪我をする前に包帯を巻く必要はない。だが、怪我をしそうになったら、あるいはそれに気づいたら、回避する行動をすぐに起こさなければならない。「心が先行する」とは、目の前の出来事を後まわしにすることではない。人間の意識と行動のあり方において、意識が先行し、行動や現象がそれに伴って生じるのが最も自然だという意味である。

原因にまで遡って、その原因を変えなければ、結果(事件・事故)は変わらない。それなのに、目に見える結果だけを何とかしようとするのがふだんのわれわれのやり方だ。このことが気づかれないまま、ふだんの習慣になってしまっているのではないだろうか。

起こってしまったことは、すでに起こってしまってもはや変えられない。だとしたら、その事実をまるごと受け入れることが先決だ。これは一見したところ「心が先行する」ことではないかもしれないが、事実をそのまま受け入れるというのも心の働きであり、その心を正常なものにすることで、

次の行動がより自然で、適切なものになりうるという点では、「心が先行する」とみなすことができる。

いっぽう、先述した「後手にまわった対処法」はいわゆる対症療法となり、結果として現象化したものを後から何とかしようとする一時的な処置、効果の出ない悪循環になりやすい。

だから、この先手と後手の関係をひっくり返して、まだ何も起こっていないように見えるときから、みずから内的に感じとったことをもとに行動を起こす必要がある—自然界の動物たちが各種の災害を事前に察知して行動を起こすように。

<気がついてはじめて力を出すようなことではいけません>と合気道の開祖、植芝盛平は述べたが、それはこの意味だろう。それは「対処」というより、「先手必勝」の極意であり、意識のスピードを速めて、それを行動に反映させるスムーズな方法である。

繰り返すが、「心が先行する」とは、みずからの心のあり方、持ち方がまず先にあり、それに応じて物事や状況が定まることを意味する。丸山敏雄著『万人幸福の栞』の第三条の「運命自招」には<毅然と立って行なえば運は開ける>とある。しかし、毅然と立つことのできない弱い心、状況に対して屈服してしまう心を持つわれわれは、<外的な状況が先にあり、心の状態はそのあとにくる>ように飼い慣らされている。これが通常のわれわれの心であり、認識の仕方である。

なぜこのようになってしまっているのか？われわれがいわゆる現実というものを主体的・能動的に知覚しておらず、受動的に知覚させられているからではないのか。現実という流動的な夢を想像・創造するのではなく、すでにある過去の遺物としての固定的な現実・夢の中に閉じ込められているのだ。

われわれの現実認識は、根源的な感性が鈍ったところでなされるために、<木の枝が動いたから、風が吹いた>と後から認識する形でなされる(風を直接知覚せずに、視覚に依存している場合)。そのため、この逆転した見方(=錯覚)のほうが主流となっている。

なぜ、われわれはこのような「心の後追い」が自然であるかのような思い込み—誤った常識および本来の生きる道とは逆の、正反対の方向性—を身につけてしまったのだろうか。それを知るには、われわれが無意識の奥底に封印したみずからの乳幼児期の体験と記憶について、もう一度さかのぼって思い出す必要がある。本論では、<乳幼児期にわれわれに起こったことがわれわれの認識方法を逆転させてしまったのではないか>という観点から考察を進めたい。

なお、以下の論考はある程度、丸山敏雄および彼の提唱した純粹倫理についての知識がある方に向けて書かれていることをご了承いただきたい。